

義太夫

義太夫協会会報
第98号

平成 26年 1月 1日
一般社団法人 義太夫協会 発行
〒104-0045
東京都中央区築地 4-1-1 東劇ビル 17F
Tel. 03(3541)5471
Fax. 03(3546)2334
<http://www.gidayu.or.jp>

「初詣で」は

両国回向院へ

原道生

新年おめでとうございます。
 本年もよろしくお願いたします。
 というご挨拶を、私は、今、十一月の中旬
 に書いています。

ですから、この拙稿のタイトルが、そのあ
 と、さらに続けて、「行ってきました」にな
 るのか、それとも、「行けませんでした」に
 なるのかは、現在のところ、全くの未定です。
 余談はさておき、この回向院への初詣での
 最大の目的は、勿論、鼠小僧の墓へのギャン
 ブル祈願などではなく、その裏手に位置する
 初代竹本義太夫の墓所へのご供養であること
 は申すまでもありません。

平素は、出不精と寒がりところが重なって、初

詣でなど滅多にしない私を、このような気持
 にさせたものは、先般、初めて参加させてい
 いただいた祖先祭の、なごやかで且つ敬虔な印
 象でありました。お寺様による厳粛な法要を
 始めとして、正会員有志の方々すばらしい
 奉納と追善の演奏、そして、お墓参りに続い
 ての、昼食をいただきながらの和気藹々とし
 た懇談会等々。さいわいおだやかな秋日和に
 も恵まれて、楽しい一日を過ごしているうちに、
 祖先・先人の遺徳を、感謝の念を込めつつ偲
 ぶということの意義深さが、自ずと身に沁み
 て感じられてきたという次第です。どうか、
 この時と同じ気分を、改めて新年の空気の中
 でも味わってみたいものと思っています。
 ところで、ご存知の通り、この両国回向院
 の近くには、吉良上野介の屋敷がありました。
 元禄十五年（一七〇二）の十二月、赤穂浪士
 がそこへ討ち入った時には、初代義太夫は五
 十二歳、その翌年には、近松作の『曾根崎心
 中』を初演して大当たりをとるなど、いよいよ
 充実の時期を迎えつつあった年頃です。そ

して、その七年後の宝永七年（一七一〇）、
 彼は、やはり近松の作になる『碁盤太平記』
 で、上野介をモデルとする高師直が、大星由
 良之助らに討ち取られるという場面を語って
 いるのでした。その時の彼は、まさか約三百
 年の後、今自分が舞台で殺している師直の住
 居、すなわち、両国の吉良邸の直ぐそばに、
 自分の墓が建てられることなるうなどは、
 夢にも思っていなかったことでしょう。一寸
 した歴史のいたずらなのかも知れません。

原道生（はら みちお）

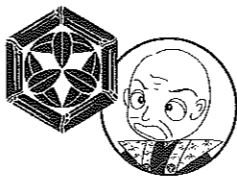


昭和十一年、まだ東京市外だった武蔵野町に生
 まれる。東京大学大学院修了。横浜市立大学を経
 て、明治大学文学部教授。退職後の現在は同大学
 名誉教授。歌舞伎や文楽に親しむようになったの
 は、中学生の頃なので、同年代の市内育ちの子供
 たちよりはスタートが遅く、六代目菊五郎の舞台
 は、数ヶ月の差で見られなかった。専攻は近松を
 中心とする日本近世芸能。大学では、授業の他に、
 何も実技を知らないままに、学生の三曲研究部や
 歌舞伎研究会の部長を務めさせられる。義太夫協
 会では、義太夫教室の歴史の科目を担当。また、
 昨年度より監事に就任した。著書は『近松浄瑠璃
 の作劇法』（八木書店）、『近松門左衛門（新潮古典
 文学アルバム）』等。

—そして、これから

義太夫協会では、義太夫の始祖竹本義太夫をはじめ、祖先を敬い、感謝し、また、今後の繁栄をも願う目的で、毎年、義太夫のお墓のある回向院にて祖先祭を開催しています。昨年十一月三日は、竹本義太夫三百回忌にちなみ、講演と奉納演奏を加えた内容で開催したところ、正会員のほか、義太夫の稽古をしている方々やお客様の参加も多く、総勢七〇余名の賑わいになりましたこと、一同感謝の念にたえません。ありがとうございました。昭和三〇年代から参加している駒之助師匠でも、このように盛んな祖先祭ははじめてだったそうです。

祖先祭 2013年11月3日



竹本義太夫300回忌 義太夫協会 祖先祭実行委員会

また、長年、保存会会長を勤めた竹本越道師匠が、九月十一日に逝去、追善演奏も加え、長年とだえていた懇親会も復活しました。準備には実行委員会を組織し、事務局と連動し、都合で当日参加できない正会員も、イラストを描いたり、記念品の手配をしたり、と協力を取りました。当日の本堂には人形浄瑠璃文楽座因講からの供花が飾られ、いつもの法要の後、監事原道生先生の講演。焼香台を演台に、初代義太夫の四天王寺のお墓等に実際改めていらしたという誠実なお人柄に、会場がなごみます。奉納演奏は、本堂の後ろから、道中双六を。通常と違って、いろいろな人がソロや替手をとる形でややこしいながら、演者もモチベーションがあげられます。そして墓参。お線香を持ちながらの行列に、手が熱い！という一幕も。懇親会は、昨年新築された念仏堂祈りの間で。波多会長のご挨拶をはじめ、皆が知らないままだった、そもそも祖先祭はどういう集まりだったか、について水野悠子先生のお話。駒之助師匠、綾之助師匠、土佐恵師匠、それぞれの時代の祖先祭のお話。回向院の義太夫のお墓がなぜできたのか、について早稲田の神津武男先生のお話。大日本素義会会長菅野昌行氏、監事児玉信先生、原道生先生、見台等ご寄贈いただいた竹本和佐之助師匠のご遺族にもお話いただき、人のつながりのありがたさと、継いでいくことの大切さを感じました。最後に、長年女義を見守って下さっている、池田弘一先生の楽しいお



(鶴澤津賀寿)

話。記念品についての説明後、奉納演奏。駒之助師匠の「越道師匠をはじめ、先人を思つてささやかながら演奏させていただきます。」という涙まじりのご挨拶に続いて野崎村。財政危機に陥っています義太夫協会、こうした正会員および周辺の方々の協力が、気運を盛り上げる第一歩になれば、この上ない喜びだと思います。今後とも義太夫協会をご後援のほど、よろしくお願い申し上げます。

創作浄瑠璃 「おいてけぼり」

昨年八月のぎだゆう座では野澤松也氏作曲、橋本保氏再話による創作浄瑠璃「江戸情七不思議おいてけぼり」を上演致しました。上野広小路亭にて、語り竹本越孝、三味線鶴澤弥々にてつとめさせていただきました。

「江戸情七不思議おいてけぼり」は数少ない、生粋の江戸っ子が登場する作品です。怪談でありながら、どことなくユーモアの漂う作風で、納涼公演にはびつたりの内容ということもあり、間を明けながらも、気がつけば昨年で三回目の上演です。

松也氏に作品をご提供頂いたのは、平成十九年「役者演劇魔王」が始まりです。「どんだん舞台にかけてください」というお言葉に甘え、ぎだゆう座では「友情泣赤鬼物語」、「降積雪六傘地蔵」など、様々な創作浄瑠璃を上演しております。

馴染みのあるわかりやすい筋立てで、老若男女問わずお楽しみいただけることから「親子で楽しむ義太夫の会」という企画を行ったこともあり、その際の松也氏ご本人による弾き語り及び解説は、大変好評だったことが記憶に残っています。

その年の八月から、浴衣でお越しのお客様には、お得な割引サービスを実施しております。昨年は浴衣姿のお客様が多く見受けられ、ぎだゆう座の「浴衣祭り」も定着しつつある印象です。皆様に会場の雰囲気盛り上げていただきました。

(鶴澤弥々)

—大阪だより—

上方落語の定席「天満天神繁昌亭」が開場七周年を迎えました。繁昌亭はNHKの連続テレビ小説の題材になるなど、落語ブームの牽引役になっています。

昨年九月十五日に記念公演が開催されましたが、一昨年は歌舞伎を上演したりと、毎年落語以外の事に挑戦しているそうです。

昨年は義太夫で「伽羅先代萩」の政岡忠義の段を私が弾かせていただきました。当日は台風襲来という悪天候でしたが、鏡開きのお祝いの時は雨も止むなど、神様もお祝いをして下さっているようでした。一日三回公演の切符は即完売で、当日立ち見のお客様もたくさんいらしていただき、御殿は政岡を鶴瓶師匠と文枝師匠が前後に分け、春之輔師匠が八汐と、太夫さんが八人並んでの掛合は壮観でした。

繁昌亭のすぐ近くに上方落語協会の会館もあつて稽古場も充実し、吉本だったり松竹だったりと所属はみなさん違いますが、上方落語発展のために頑張つていらつしやいます。

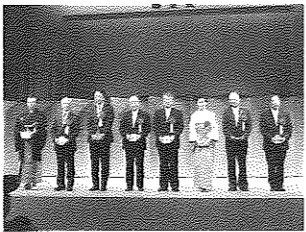
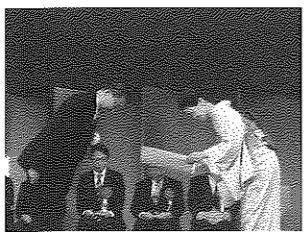
数年前、江戸時代から続いていた人形浄瑠璃協会がなくなつてしまいました。もちろん私など何の力もなかったのですが、何もできず成り行きにまかせてしまいました。

落語家さん達を見て、私たちも皆で力を合わせれば何かできたのかもしれない...と、ふと考えてしまいました。

(鶴澤寛輔)

—淡路だより—

昨年十月二十四日に「伝統芸能ポラ賞・地域賞」を頂いて参りました。まさか私のような若輩者がこのような賞を頂けるなど夢にも思いませんでしたので、ただただ驚いております。



これも淡路人形浄瑠璃の里で生まれ、鶴澤友路師匠に出会い、そして淡路人形座と共に四半世紀を過ごさせて頂いたお陰と、心より感謝しております。

義太夫三味線の音色に魅せられ、研究と稽古の日々ですが、少しでも師匠に近づけるよう努力し、それだけではなく、淡路島にしか残っていない演目やすでに途絶えてしまった演目の復曲にも、積極的に取り組んでいきたいと思っております。

このような栄えある賞を頂き、これほど励みになることはありません。これからもこの賞に恥じぬよう努めて参りたいと思っておりますので、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(鶴澤友勇)

義太夫教室第六期上級開講

新年より義太夫教室上級が中級に引き続き、開講します。語りは土佐恵指導による「新口村」と「裏門」、越若指導による「草履打」、三味線は駒治指導による「組曲」を、皆さん和氣藹々と学んでいらつしやいます。今期は人数はやや少ないものの、その分きめ細かい指導が受けられると受講生には好評です。三月八日(土)の発表会に向け、いよいよお稽古にも熱が入る時期です。

発表会当日は受講生は勿論、卒業生の皆さんの熱演揃いの舞台を楽しみに、是非FSホールへ足をお運び下さい。

また、例年は四月と八月に実施している「一日体験教室」を、今年初の試みとして二月にも実施することが決定しました。

八日(土)豊川稲荷文化会館にて、三味線コースが午後二時半〜四時、講師は鶴澤津賀寿。語りコースが午後五時〜六時半、講師は竹本越若。通常二時間のところ一時間半にし、その分料金も低く設定してあります。何となく敷居が高い、正座がづらい、と思つていらつしやった方も、より気軽に「ご参加頂けるこの機会に是非、義太夫に触れてみてください。」

お問い合わせ・お申し込みは義太夫協会事務局まで。

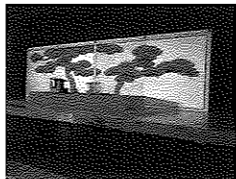
文化庁 巡回公演事業

「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」の一環として昨年十一月に八王子車人形と一緒に神奈川県と愛知県の小中学校を巡回しました。これは子供たちが芸術を鑑賞するだけではなく何かを一緒に作り上げること、に重きを置いたもので、プログラムはまず「刃傷」を短縮版ですが素浄瑠璃で演奏、クイズ等も織り込んだ義太夫節の解説を挟んで、「日高川」の一節を生徒たちが披露。これは八月・九月に事前にワークショップを行ったもので、生徒たちは浄瑠璃の稽古に加えて発表の際に着用する肩衣を紙で拵えるという作業も行いました。

全校生徒が声を出す体験もあって後半は人形の解説から始まり、実際に人形を遣う体験をさせてから最後に「日高川」を人形入りで上演、ここでは大蛇や浪幕を生徒が操作しました。

浄瑠璃の発表もそうでしたが、最初は消極的だった生徒たちが本番を終える頃には生き生きとした笑顔を見せてくれ、こちらも大いに達成感を持つことができました。

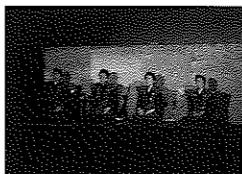
(竹本越若)



江戸糸あやつり人形座の学校巡演

文化庁による「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」で、昨年十一月にかけて、江戸糸あやつり人形座が、新潟県・富山県・石川県・福井県・京都府内の二十校(小学校十九校、中学校一校)を巡る公演に、竹本綾之助・竹本綾一・鶴澤三寿々・鶴澤津賀榮・鶴澤弥々の五名が参加しました。

公演の内容は、前年同様で、人形の舞踊「三番叟」(テープ演奏)、人形浄瑠璃「橋弁慶」、創作話「たのきゅう」(演奏は義太夫、セリフは人形遣い)と三本立てですが、今回は「たのきゅう」の登場人物が一人増えたり、お芝居に参加する生徒代表二人も人形を操りながらセリフを言うなどしました。



福井市では、NHKの福井版朝のニュースで、学校公演の予告があり、夕方のニュースでは、公演の様子が放映されました。また、地元紙には、越前がに解禁の記事の隣に、写真入りで載りました。

また、給食をごちそうになったり、小学校の校名入りお菓子を戴いたり、昼食時に、肉じゃがやトン汁が振舞われたり、学校のおもてなしに、感激しました。

(竹本綾一)

◇「本牧亭を聴く会」

その五を開催して◇

SEIBI工房 鳥居 誠

SEIBI工房で進めてきた義太夫協会保有の古い音源の復刻の中から昭和三〇〜四〇年代にかけて本牧亭で収録された名演を聴く「女流義太夫 本牧亭を聴く会」も、昨年からは義太夫節保存会の主催として開催する運びとなった。場所も最初三回のMAKOTOシアターから定期公演でもおなじみとなったお江戸日本橋亭に移し、去る十月二十七日にシリーズ五回目として竹本春華師の「宿屋」をお聴きいただいた。

年二回程度ということで再スタートした「本牧亭を聴く会」だが、今回は秋の芸術シーズン真っ直中ということもあり、しかも会場が押さえられたのがこの多忙な時期の日曜日の夜のみ。そんなこともあって関係の方々には皆さんお忙しく、実は直前までは集客にはかなり不安があったのだ。しかしその不安も当日蓋を開けてみると予想以上の方々に会場いただいた。ご来場の皆様および関係の方々にはこの場をお借りして御礼申し上げます。

そんな第五回目だが、この昔の音源復刻プロジェクトも第一回〜第四回までのものは既に義太夫協会からコピーCDでご自宅でも楽しんでいただけるようになっていた。それも

あつてか今回の開催に当たっては「何もわざわざ会場まで足を運んで聞きに行かなくてもCD聴けば良いではないか・・・」などと思われていたのではと、自分でそうしておきながら実はけっこう不安もあったのだ。ところが蓋を開けてみて、また実際に皆様と一緒にこの音源を会場で聴いてその不安は一気に吹っ飛んでくれた。

当然ながらこのイベント開催にあたっては皆様にお聞かせする音源を準備するわけで、デジタル化したオリジナルの音を観賞用に多少音質補正したり、不要なノイズの除去などの作業を行う。つまりその作業を通じてこの演奏を何度も繰り返し聞くわけで、当日までにこの演奏はかなり頭の中に入ってしまった。イベント当日にはある意味新鮮な感覚ではないはずなのだ。しかしである。当日皆様にご来場いただき、広い空間でお客様と一緒にこの音源を聞くと、それまで繰り返し聞いてきた演奏が、一人で聞くのとは違いとても生々しく、なにか「別次元」の世界がそこに現れるから不思議なのである。

話はそれるが、以前駒之助師匠のCD全集を制作したとき、最初の数曲までは普通にスタジオ録音をしていったものを、あるライブ録音を経験して以降、残りの収録にもお客様を入れて録音するという方法に切り替えたことがある。それは、観客がいるのといないのである。演奏の迫力がまったく違う事に気がついたからだ。実際録音レベルをメーターで見ても明らかに音質が変わる。もちろん雑

音という観点からいえばデメリットもあるのだが、それ以上に生の音楽には生の聴衆の「気」が不可欠なものなのだとこのことを感じたことがあった。

もちろん「本牧亭を聴く会」は録音されたものを再生しているだけなので、駒之助師匠のそれは異なるものだ。しかしそれでも多くの方の「気」というものが同じ場所ですべて聞いている人に、説明のつかない「何か」を付加することは実際に起こるのだと思う。録音されたものでも明らかに会場で大勢で一緒に聴いた方が楽しい。おかげで今回の開催に向けて意欲が湧いてきた。

「お客様は神様です」という某歌手の名言。こんなことから本当に大切にしなければいけないことだとあらためて痛感した次第である。

「大日本素義会」―百回目を迎える！

来たる五月二十四日(土)に、浅草鳥越神社内の白鳥会館において、節目となる記念の会が開催されます。

当日は、常連の方だけでなく、初参加の方も大歓迎です。百回記念ならではの、サブライブ番組も考慮中とか。

昭和三十八年に始まった当会も、半世紀を過ぎ、百一回目からは、時代にマッチした会名に改めて再スタートする事を検討中だそうです。今後益々のご発展をご期待申し上げます。

(竹本佳之助)

追悼 竹本越道師匠

竹本越春

門弟を代表して、師匠の最期のことを皆様にお話しさせて頂きました。

平成二五年九月十一日午後八時二五分、越道師匠は逝去されました。

二月に百一歳の誕生日をお祝いしたときはたいそうお元気でしたが、この夏の猛暑がかなり体にこたえたのか、七月半ばくらいからだんだん食欲がおとろえていき、亡くなる直前は点滴を入れておりました。

最期はご自宅で眠るように息を引き取られました。

知らせを聞いて駆けつけたときは、師匠の体はまだ温かく、息を吐いていないということがわかには信じられませんでした。ずっと病んでいたり、入院したりしていれば覚悟はできていたのかもしれませんが、あまりに自然に逝ってしまったために、いまだにお宅にお邪魔すれば師匠が出迎えて下さるような気が致します。

葬儀は、生前からご家族ともに話し合い、身内のみで簡素にとり行いました。

最後の舞台は、平成十九年十二月、国立劇場演芸場にて「仮名手本忠臣蔵」七段目の大星由良之助のお役でした。

(2014.1.1)

を三年ほど前まで続けておられました。師匠が義太夫教室の講師をされていたときからのお付き合いがある方々ばかりで、「お師匠さんに会うと元気が出る」と言っては月に何回かお稽古にいらして、師匠もみなさんと話をするのが張り合いだったようです。

昨年五月にはひ孫が生まれ、「かわいいねえ」と目を細め、成長を楽しみにしておられました。師匠がこれほど芸に打ち込め、健康でいられたのは、ひとえにご家族のあたたかい支えがあつてこそでしょう。

私は師匠が九〇歳を過ぎてから入門いたしました。「私ははじきに死ぬんだから、私の言うことはちゃんと覚えるんだよ」とお稽古のとき何回も言われました。命を削ってお稽古をして下さった師匠には、ただ感謝の言葉しかございません。「あたしは義太夫師匠しかやってこなかったし、それしかできないから」とよく仰っていました。義太夫語りとして多くのお客様の心に触れ、師匠として弟子を育て、やるべきことをやり尽した、見事な生涯だったと思います。

今頃はあの世で昔のお仲間と存分に義太夫を語っておられると思うと、少しは心が安まります。師匠の志を受け継ぎ、師匠のように義太夫節を愛し、後世に残せますよう、門弟たちの試練は始まったばかりです。越道師匠の語りを愛して下さった皆様には、どうか今後暖かいお力添えを心よりお願い申し上げます。次第でございます。

祖母竹本綾春のこと

豊澤 雛文

『大きいばあちゃん』私の子供の頃、曾祖母の豊澤小住がまだ健在だったため、体の大きさから祖母の事をそう呼んでいました。

孫が八人、ひ孫も八人いて、盆や正月に皆で集まって食事をする事が楽しみで、ひ孫が遊んでいる様子を嬉しそうに見ている姿は今でも目に浮かびます。

私が入門後は芸に関しては全く口を出さず、傍で温かく見守ってくれていました。「天狗になつたらあかん。偉そうにしたらあかんぞ。」という事は私の顔を見るたびに申しておりました。

祖母はおおらかな性格でよくよしない人でしたが、一方でとてもマメでした。お稽古に連れていた方の子供が結婚した、孫が産まれた、と聞くと、その子の名前や誕生日まで記憶していたことには驚きました。そんな人柄が多くの方々に愛されていたのでしょうか。

一昨年、亡くなる前年に足を骨折しましたが、入院先で弾き語りをするほど元気で見事回復し、昨年四月には私が三味線を弾いて国立演芸場舞台を務めさせていただくことができ、「来年は何をさせてもらおうかなあ」と次の機会を楽しみにしておりました。残念でなりません。

あまりにあつたけなく旅立ってしまった、家族としてはなかなか実感がわかず、寂しい限りですが、祖母らしく潔い最期だったと思います。「九六年間お疲れさまでした。ありがとう。」

(2014.1.1)

追悼 竹本清太夫師

竹本葵太夫

歌舞伎の舞台で義太夫節を語っております私ども竹本連中の太夫の長老、竹本清太夫師が九月一日逝去されました。五年ほど前から心臓の不調のため療養中でした。享年七八歳。

お若いころから義太夫を愛好され、女流の竹本東代春師に習っておいででしたが、二十七歳で文楽の豊竹若大夫師に入門。文楽が苦難の時代に若治大夫を名乗り四年ほど在籍。廃業後いろいろな職業を経験され、道で綾太夫師に再会したのがきっかけで三九歳にして竹本入りしました。竹本研修生の第一期生であります。二代目の鴈治郎丈に曾根崎心中道行の代役で認められ、その後、幸四郎丈・吉右衛門丈・勘九郎（勘三郎）丈と多くの俳優さんに「清さん、清さん」と親しまれ、舞台を勤めて来られました。勘三郎丈との舞台にはいろいろと珍談もありましたが、「清さんが体調よくなつたら団子売で復帰させたい」とまで買つていらつしやいました。惜しくも勘三郎丈の方が先立たれましたが、

舞台で語り始めると、語りに没頭されるので、「清さんに喰われちゃうから出語りはさせない！」という俳優さんがあつたほどです。その力強い語りに魅せられたごひいきもたくさんいらつしやいました。筆まめな方でファンレターにはきつちり返信なごり、年末に親しいお客様には国立劇場のカレンダーを送るのが恒例でした。

竹本越道 芸歴

- 大正 六年 竹本三八に手ほどきを受ける
- 大正十二年 竹本越喜太夫に入門
- 大正十四年 野沢道之助に三味線入門
- 大正十五年 竹本越道を名乗り、浅草雷門東橋亭にて真打披露
- 昭和二年 義太夫協会理事
- 昭和五四年 芸団協芸能功労賞受賞
- 昭和五五年 重要無形文化財総合指定保持者
- 昭和六二年 義太夫節保存会理事
- 平成 二年 勲五等瑞宝章受章
- 平成 五年 義太夫節保存会会長就任
- 平成 八年 「竹本越道を聴く会」開催
- 平成十三年 「卒寿の会」開催



〔平成十九年十二月十九日「仮名手本忠臣蔵」写真 福田知弘〕

芸に没頭されるのは日常でもそうでした。道を歩きながら義太夫節を語り、ちよつとオンを遣うところでは立ち止まって語られました。

「人様に迷惑をかけたくない」という遺志からお身内だけの葬儀で旅立たれ、訃報もしばらく伏せられました。江東区猿江の重願寺にある小林家墓所に葬られておいでです。清太夫師が没され、入門順では私が最古参になつてしまい、いささか戸惑っております。竹本連中、太夫十六名・三味線十三名、きちんと歌舞伎のお役に立つよう努力を重ねてまいります。

竹本清太夫

本名・小林将人（こばやし・まさと）

昨年九月一日午後四時四分、心不全のため逝去。享年七八歳。

昭和三十一年、女流義太夫の竹本東代春に入門。昭和三十七年、文楽の豊竹若大夫に入門。豊竹若治大夫を名のる。昭和三十九年、三越劇場文楽公演で初舞台。昭和四一年まで在籍。昭和四九年、竹本清太夫を名のり歌舞伎座「本朝廿四孝」の「狐火」で歌舞伎の初舞台を踏む。竹本では、竹本扇太夫、豊澤瑩緑に教えを受ける。昭和五三年国立劇場第一期竹本研修修了。平成二年から同講師。

重厚な時代物から新作まで幅広い舞台を勤める。最後の舞台は平成二〇年十月平成中村座（浅草）「仮名手本忠臣蔵」で六段目「与市兵衛内勘平腹切の場」、八段目「道行旅路の嫁入」、九段目「山科閑居の場」を勤めた。

ほんに気がメ〜リヤス

(十四杯目)

鶴澤慎治

不肖私、年二回発行のこの会報で当欄を担当させて頂き(途中休載も数度ありましたが)今回が十四杯目ということは、十四÷二年近く続けてきたんだな、と我ながら感心する次第です(今回も休載寸前でした。編集部の皆様、ごめんなさい)。

そんな私が、一昨年から、当協会主催の義太夫教室の講義まで仰せつかっております、これまた私なんかで本当にいいのかな、と毎回思いつつ(当連載にまあるような)いつもの調子でお話を進めさせて頂いております。

その中で、どうしても一通り触れなければならぬのが、「歌舞伎の中で、人形浄瑠璃発祥の演目、即ち義太夫狂言がどのように発祥したか」に至るまでの、「出雲の阿国に始まる歌舞伎の歴史」〜お上からの度重なる(現代で言えば風営法がらみの)禁止令を経て、歌舞伎が「ストリー性重視の、芸をみせる演劇」へと変貌して行く中で、興行的思惑もからみ、人形浄瑠璃と出会うべくして出会い、それをレパートリーとして取り入れていくのです。

私がこの話をさせて頂く場合に、遊女歌舞伎の段で必ず「京都の洛中洛外図にもある」と説明しております、その洛中洛外図の名品が、昨春秋、上野の国立博物館で大々的に展示されていきました。「本物を見ておくのは大事だぞ」

ということ、私も足を運びましたが、平日にも関わらずたいそうな人出で、さすがだなと思いました。

この展示方式が至って親切で、まず入場いたしますと、巨大なマルチスクリーンに、主要な洛中洛外図の全体図から、部分部分のズームアップに「遊女歌舞伎」「人形浄瑠璃」「花見帰りの客」といった説明を付けて見せてくれる。で、お客さんは、その説明を見て、ある程度の見当を付けてから実物を見る、という訳です。ところが私、「何の何の、自分は本物を見に来たんだ、電光掲示板に来たんじゃないや」と粋がって、展示を間近で見ようとする方々の、長蛇の列の最後尾に並びました。

：が、やはり郷に入つては郷に従えで、顔を近づけてみられるような展示であるはずもなく、何がどこにどのように描かれているかも分からないため、結局すごすと元のマルチビジョンに戻るはめと相成りました(笑)

今時、分からないことがあつたとき、パソコンやスマホの検索窓にキーワードを打ち込めば、実物を知らなくても理解したような気になつてしまします。先の博物館の話で言えば、マルチビジョンの方が大きく見えてよく分かるから、よく見えない本物見るよりずっといいじゃん? みたいな：それでも我々のような実演家は「生でないと伝わらないもの」と思いますが、こうしたインフォメーションテクノロジーの過剰な発達と、メディアがこれでもかと思わせる様々の情報生き方、仕事、ファッション、恋愛等々によって形作られる「多くの人がそう

だと感じる理想像と価値観」という幻影(ビジョン)は、時として、そのような理想像や価値観から外れるものゝオリジナルな存在である自分自身をも否定してしまうのではないかと、思うのです。

スマップの「世界でひとつだけの花」は、一番にならなくても、オンリーワンになればいいと歌っていますが、実際には誰もがオンリーワンにならないように、評価が落ちないように、いじめられないように、馬鹿にされないように、衰えたと言われぬように、あくせくしている。そんなときは、世阿弥の言う「(年相応の)花」ということを思いだすといいかもしれませぬですね。

全てを失つてなお残る花。

たかが展覧会のマルチビジョンで、エライややくしくなりましたが、ビデオ、CDも結構ですけれど、「今」を直接知るためには、やはり演奏会・劇場にお運び頂くのが一番ということ、今年もよろしくお願いいたします、という話でした。

義太夫教室時代からお世話になりました越道師、公私でお世話になりました清太夫師、様々なご助言やご指導を頂きました川瀬白秋師のご冥福をお祈り申し上げます。

シリーズ人物像

竹本綾之助編 第一回

東京の杉並の生まれで、暮らしの拠点は今と大して変わりありません。十歳と七歳上の兄が二人いて、年が離れていたためか色々可愛がってもらいました。小さい頃、お医者様から「この子は火葬場の前に居ると一緒だよ」と。へその緒を首に巻きつけて生まれて来たものの、手が引つかかかっていて無事だったそうです。体は弱かったですね。子供の頃の性格ですか? 母が私について学校へ提出した書類に「従順」と書いたのを覚えています。当時は従順の意味が分かりませんでした(笑)。師匠にも「この娘は居ても邪魔にならないからいいの」なんて言われていました。

私の母は東京、芝の浜松町の出です。昔、母の弟のお嫁さんの実家があつた、和歌山県の田辺の伯扇閣という温泉旅館に疎開していたことがあります。田辺は芸所で、その芸者さん達のあまりの素晴らしさに母は目を見張ったそうです。いいなあつて。

芝も近くに神明さんがあつて、花柳界がある賑やかな所でしたから、芸を嗜む人が周りに大勢いました。私は白粉塗った芸者さんとお風呂に入つて来て、いいなあーと思つたことくらいしか覚えてませんけど、そんなところの生まれの母でも、田辺の芸者さん達には

圧倒されたようです。その旅館は海の方にあつて、台風でそれはもう何度も流されたそうです。うちは田辺に疎開しましたが、東京の本当の都心に住んでいた豊澤幸治さんが「方南町に疎開したことがあるのよ」つて仰有るくらいだから、杉並つてそんなところですよ。私は幼稚園に行かず踊りの稽古に行きました。兄たちは幼稚園に行きましたけど、戦争とか時代が悪かつたんでしようかね。稽古場には沢山レコードがあつて、例えば常磐津なら宮尾太夫さんを聴いたのをよく覚えています。こうやつて手で取っ手を回して。六枚くらいあつて『三ツ面子守』のおかめとひよつとこのが今でもすぐく頭にあるの。あとは市丸、二三吉、東海林太郎、音丸、神楽坂はん子、神楽坂浮子：それぞれが結構強烈。私が六歳くらいの頃ですからね。当時、小っちゃい場所でしたけど、踊りの会にも出ましたよ、「菊づくし」。写真もあります。



踊りには週三回、小学校五年生からは長唄を始めたので、月水金、火木土と毎日お稽古。だから後に野澤錦輝さんにね、芸者屋の下地

つ子みたいね、つて言われてしまいました。

長唄のお師匠さんは稀音屋正佐江さんと仰有つて、六十代くらいだつたように思います。着物で髪をひつつめにして、きちつとした居住まい。杉並の和田にある古風なお家だね、夏になるとちやんと簀戸に入れ替わるの。待合室に『演劇界』が積まれていたので、役者さんの名はそこで覚えられました。芝居好きなお師匠さんで、会の余興なんか「知らざあ言つて〜」なんて言い出しちゃう。そのお師匠さんがね、私に「照代ちゃん、蚊の鳴くような声だね〜」つて。私、そんな声で唄つていたのよ。だから義太夫の太夫になるなんて、これっぽっちも思つていなかったです。長唄のお稽古に行くようになったのは両親の意向です。だから「こんにちば〜」つて言つてお返事がないと「あ、いらつしやらないんだな」つて帰つちゃうつて、遊んでました。母は土地柄、長唄が好きでしたね。

母の家は銀座の菅原電器で修行した後に浜松町で独立して、住まいは目黒にありました。母が子供の頃は長唄のお稽古場が混んでいて、順番取りをしに行かなきゃお稽古を受けられないくらいだつたそう。義太夫のお師匠さんも近所にいらして、よく「川越(かわごし)たち〜」つて聞こえたんですつて。でも母の家は電器屋で日立だの東芝だの扱つてたもんだから、ずつと「かわご日立〜」つて聞こえてたみたい。後年、それは宿屋の大井川だよ、つてちゃんと直しておきました。(つづく)

(聞き取り・鶴澤三寿々)

協会の動き

【平成二五年七月から十二月まで】

七月一日(月)・二日(火) 「じよぎ」公演
 於 お江戸上野広小路亭
 七月七日(日) 義太夫ひとくち・ひとばちお稽古体験
 於 アサヒアートスクエア
 七月二〇日(土) 女流義太夫演奏会
 於 お江戸日本橋亭
 七月二七日(土) 義太夫教室六六期初級終了
 於 豊川稲荷文化会館
 八月一日(木)・二日(金) 「ぎだゆう座」公演
 於 お江戸上野広小路亭
 八月二一日(水) 女流義太夫演奏会
 於 国立演芸場
 八月二四日(土) 一日体験教室
 於 豊川稲荷文化会館
 九月一日(日)・二日(月) 「じよぎ」公演
 於 お江戸上野広小路亭
 九月七日(土) 義太夫教室第六六期中級開講
 於 豊川稲荷文化会館

九月二〇日(金) 女流義太夫演奏会
 於 お江戸日本橋亭
 十月一日(火)・二日(水) 「ぎだゆう座」公演
 於 お江戸上野広小路亭
 十月十九日(土) 第九九回大日本素義会
 於 鳥越神社内白鳥会館
 十月二二日(火) 女流義太夫演奏会
 於 国立演芸場
 十一月一日(金)・二日(土) 「じよぎ」公演
 於 お江戸上野広小路亭
 十一月 文化庁「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」公演
 神奈川四校・愛知県四校
 十一月二〇日(水) 女流義太夫演奏会
 於 お江戸日本橋亭
 十二月一日(日)・二日(月) 「ぎだゆう座」公演
 於 お江戸上野広小路亭
 十二月二〇日(金) 女流義太夫演奏会
 於 紀尾井小ホール

今後の予定

【平成二六年】

二月八日(土) 一日体験教室
 於 豊川稲荷文化会館
 二月十一日(火・祝)・十二日(水) 女流義太夫スペシャルライブ
 於 神楽坂ザ・グリ
 三月三日(月) 第十一回素浄瑠璃の会
 於 お江戸日本橋亭
 三月八日(土) 義太夫教室卒業演奏会・OB会
 於 スペースSF汐留
 三月十五日(土) 第四四回邦楽演奏会
 於 国立小劇場
 四月六日(日) はなやぐらの会
 於 紀尾井小ホール
女流義太夫定期演奏会日程
 一月二〇日(月) お江戸日本橋亭
 二月二五日(火) 国立演芸場
 三月二〇日(木) お江戸日本橋亭
 四月二三日(水) 国立演芸場
 五月二〇日(火) お江戸日本橋亭
 六月二五日(水) 国立演芸場
 七月二三日(水) 国立演芸場
 八月十八日(月) お江戸日本橋亭
 十八時三〇分開演。会場にご注意下さい。

義太夫協会会報 第98号

(2014.1.1) 尚、素女師スクラップブック及び岡田道一(蝶花形)氏旧蔵の『浄瑠璃世界』『浄曲新報』『浄瑠璃時報』は、賛助会員・渡部洋子様の御厚意により電子化して頂くことができました。

寄付 (二〇一三年 七月十一日 五十音順)
 大岩商店様 一万円
 北川和彦様 二万円
 斎藤美恵子・斎藤武・浅井興一郎様 三万円
 大日本素義会様 三万円
 豊島佳子様 二万円
 宮本笑子様 十万円
 匿名 二〇万円

寄贈 (二〇一三年 十一月 五十音順)
 久堀裕朗様 昭和三十一年録音、竹本小土佐他演奏のオープンテープ五巻
 河野国声様御子息様 ホワイトボード一台、キャビネット二基
 斎藤美恵子様、武様、浅井興一郎様 (竹本和佐之助様御遺族)
 見台二台、三味線一挺、駒、稽古本、その他資料一式
 竹本綾太夫師御遺族様 女流義太夫関係資料多数
 田中重精様、節子様 (豊澤團富久様ご遺族) 見台一台、三味線三挺、駒、肩衣、稽古本、床本、その他資料一式
 正井佳 (竹本素三郎) 様 竹本素女師スクラップブック二冊
 吉村桂允 (元竹本華昇) 様 竹本春華師遺品の肩衣、稽古本、床本一式

(以降 祖先祭御香資として寄付)
 回向院様 十万円
 (公財) 日本伝統文化振興財団様 三万円
 池田弘一様 一万円
 児玉 信様 一万円

会報九七号 訂正とお詫び
 三ページ 上段 (誤) それまでの年間は
 ↓(正) それまでの十年間は
 十ページ 中段 広告欄
 《本牧亭を聴く会シリーズ》(四)
 (誤) 弁慶上使の段 竹本素八・豊澤仙廣
 (誤) 千本松原の段 竹本素女・鶴澤津賀昇
 (正) 弁慶上使の段 竹本素八・鶴澤津賀昇
 千本松原の段 竹本素女・豊澤仙廣
 本誌面を以て訂正し、お詫び申し上げます。

編集後記
 義太夫協会はもちろん全国に会員がいるのですが、事務所が東京で会報の編集も東京メンバーが行っていることもあり、どうしても記事が偏ってしまいます。
 今回は大阪、淡路より、会員の活動を紹介いたしました。お楽しみいただければ幸いです。(編集長)
 会報編集委員/鶴澤寛也(編集長)・竹本佳之助・鶴澤賀寿・鶴澤三寿々
 編集協力/(一社)義太夫協会 事務局

謹賀新年

紋付、肩衣、袴一式 承ります
すいこう株式会社
 〒103-0004
 東京都中央区東日本橋 2-13-4
 TEL. 03-3862-9041 (代表)
 FAX. 03-3862-9042

三味線/製造・販売・張替・修理

きむら

〒151-0066
 東京都渋谷区西原 1-26-14
 tel.&fax. 03-3466-2156
 PHS 070-5457-5687

謹賀新年

あけまして おめでとうございます

大日本素義会

5月24日(土) 100回記念の会を開催
ふるって御参加下さい。
詳細は菅野昌行まで

永谷 謹賀新年

永谷商事株式会社 代表取締役 永谷浩司

本社 〒180-0004 武蔵野市吉祥寺本町1-20-1 tel. 0422-21-1711

お江戸日本橋亭

お江戸上野広小路亭

お江戸両国亭

新宿永谷ホール

地域と共に歩む 不動産賃貸業

株式会社 オ一夕力

代表取締役	渡 辺 康 成
常務取締役	高 山 早 苗
専務取締役	渡 辺 貞 穂

〒351-0011 埼玉県朝霞市本町2-5-31
TEL 048-466-2220 FAX 048-466-2684